

高知県の「がん専門分野における質の高い看護師の育成研修」修了生の活動報告

～当院の疼痛マネジメントに携わる看護師の力を高める2年間の取り組み～

研修修了生

○岡田 明子 山中 智恵 小松 由香 安岡 未希
大崎 朋子 岡部 愛 川端 美香 高橋 栄子
田内 佐妃 正岡 佳子 松本 由美

研修指導者

近藤 恵子

【はじめに】本県では平成19年度より「がん専門分野における質の高い看護師の育成研修」が行われ、58名の修了生（当院:11名）が誕生している。修了生は所属部署を中心に、がん看護実践モデルを担い、また、高知県立大学が開催するフォローアップ研修に参加し、修了生間のネットワークを深めながら自己研鑽を重ねている。当院では、修了生が1回/月集まり、研修指導者と共に院内のがん看護の課題を検討してきた。課題を検討する中で、疼痛評価において「多面的な評価に至らない」「病棟により評価方法が異なる」等の意見をもとに、院内共通の疼痛評価シートの作成と普及を目指し行ってきた。2年間の活動を報告する。

【活動内容】初年度は「疼痛初期評価シート（以下シート）」と「活用の手引き」を作成した。シートは、痛みの神経学的評価と生活や心理社会面を評価する2段階の構成とし、それぞれ30分程度と、患者と痛みの体験を共有に要する時間にも配慮した。しかし、修了生の所属部署にてシートを試行した結果、「シートを用いて患者と話すとき、痛みの相談に応じられる自信がない」等の声があり、シートの普及に先立ち、2年目は疼痛マネジメントの基礎教育研修を企画・運営した。研修は講義と、患者・看護師役割を用いたロールプレイングを取り入れ、シートを使用するようにした。研修参加者からは「基礎知識を得て、痛みをもつ患者の体験を共有する自信ができた」等、肯定的評価がみられた。また、修了生においても、研修指導者と共に教育的な取り組みを行ったプロセスは継続学習につながった。

【考察】今後は、院内でのシートの普及や、他職種との共有が課題である。活動を通して、修了生が所属部署を越えた活動を行う自信を得た。また、所属部署が異なる修了生が横断的に話し合うことで、院内の課題が見えてきた。今後、修了生間で新たな課題検討に取り組み、がん看護の質向上に力を注いでいきたい。

〔平成23年5月15日 第10回高知緩和ケア研究発表会（高知）にて発表〕